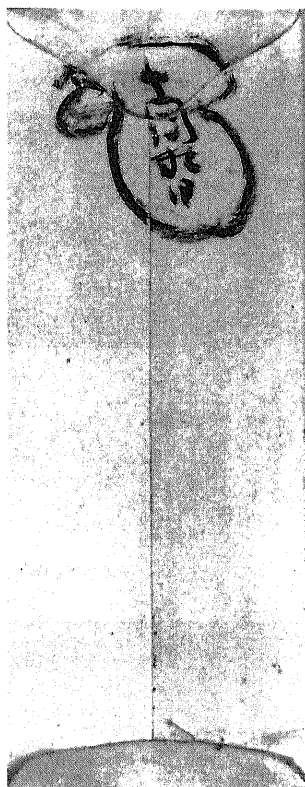


鐵齋の書美 (十六) 杉浦丘園宛書翰

野中浩俊



近現代の多くの書家や文人達の中で、鐵齋は書翰の名手としてきわめて高い評価を得ている。彼はしばしば「書き魔」と評される通り、余程筆まめであったと見え、多忙の中、実にこまめに書翰を認めている。鐵齋の書翰は若年の頃は比較的長文のものが多く、行が通り整然と書き流した感がある。しかし、年を重ねるに従って文章は簡潔になり、字粒が大きく動きは八方へ展開、複雑な均衡美を有する彼特有の美を築いている。意志の伝達という書翰本来の使命を超え、雅趣溢れる美を形成しているのが第一の特徴であろう。

さらに、「わしは儒者じゃ」と、生涯、学匠を以て任じた彼の文章は、内容が難解であるうえ書風がきわめて個性的で判読が困難であるというのが今一つの特徴といえる。

本稿では既に十四号において鐵齋書翰の書式文例を示す「鐵齋翁尺牘帖」を紹介したが、次号からは具体的に彼の書翰を取り上げ少しく私見を述べるが、本号では取り敢えず「杉浦丘園宛書翰」の紹介にとどめたい。

掲出の書翰は、京都の呉服商杉浦丘園に宛てたものである。杉浦家は屋号を「大黒屋」といい、代々三郎兵衛を名乗る呉服商であった。五代目三郎兵衛利喬は石田梅岩の門に入り、以後同家は石門心学の強力な後援者となったという（『京都市姓氏歴史人物大辞典』角川書店）。十六代目三郎兵衛利拳が丘園と号し、この書翰の宛先である。

富岡家も代々石門心学を家学としており、文中「石田先生故山の云々」とあるのは心学の祖石田梅岩の生地が丹波桑田郡東懸村（現亀岡市）であり、松茸・栗の産地であることを示している。

書翰箋として用いられた料紙は、鐵齋七十九歳の作「模石澗山水門冊」の第一図を木版下絵としたもので、最晩年の鐵齋の書風と淡い下絵の色彩が調和し、小品ながら鐵齋らしい雅致豊かな世界を醸し出している。



杉浦丘園様

富岡百鍊

十月九日

尊書拝閱致候。

貴家皆御安泰可賀之

第一義也。拙陋宛如土偶

人無所為也。

石田先生故山之松茸^五

栗子御宛ワけ不相変

之御渾情重々感謝

申述候。猶其中二御

面談相期居候。早々頓首。

十月九日 富岡鉄齋

杉浦丘園様